# 七友会だより

題字
大畑人文社会科学部長
昭和58年2月17日発行
岩手大学
人文社会科学部同窓会
第3号

## 三年目の春に

七友会会長
落安昭三

月日が経つのは非常に早いもので、また私がこの会報に会長という重責のもと、下手な文を書かなければならない羽目になってしまった。おそらく、各地にいる同窓生諸君は、またあいつの文かとあきらめに似た感じでこの会報を手にしていることだろう。しかし、つたない便りではあるが、幾分かでも、この思い出深い盛岡の香りを伝えることができればと思い再度ペンを持った次第です。

今年は暖冬であるらしく、この北国盛岡ですら、雪にお目にかかる日は数少なく、少し降ったと思えば次の日には姿を消す、という繰り返しで、根雪になることはまずないという状態です。

例年ならば、岩手山から吹きおろす風は冷たく、コートの襟を立てて歩く姿が多く見られるはずですが、今年はセーター一つでも暖かく感じ、盛岡の冬の匂いはどうしてしまったのかと心配になってきます。世の中だけではなく、自然の理まで狂い始めてしまったのかと不安な気持ちにさせる天候です。

とは言うものの、みなさんが心の中に描く岩手山、北上川、不来方城等は少しも変わることなく時を刻み続けています。しかし昨年は、待望久しい東北新幹線の開業により、わずかずつではあるが、駅周辺の開発が進み変わりつつあるという感はあります。その点では、我々の学生時代に較べ、盛岡の交通の便は非常によくなり、盛岡を訪れやすくなってきていると言えます。いつか暇をみつけて、この地を訪れてみるのも楽しいものだと思います。

ところで、早いものでもう第三期生諸君の卒業を迎える時期がやってきました。昨年と同様、同窓会から卒業生諸君にお祝いの意味をこめ、ささやかな記念品を贈ることにしました。後輩諸君の多くの思い出を詰めたものになれば幸いです。

最後に、五月に予定されている親睦会について触れたいと思います。これは、第一期生が卒業し三年目を迎える五月に、この盛岡において、またみんなと会ってみたいものだという同窓生諸君の意見を反映し、理事会もこの意見に賛成して開くことが決まりました。詳細が決まりました折には、是非休暇等を取り参加してくれることをお願い致します。この懐しき盛岡の地で、多いに語り、大いに飲み明かしたいものです。まだまだ話は尽きませんが、この地での再会を約束して終らせていただきます。

目次

三年目の春に …… 1
卒業生諸君へ
ー晴れの首途に当って …… 2
卒業に際して …… 2
窓（会員のたより） …… 4
盛岡案内記 …… 6
支部の動き …… 7
盛岡あれこれ …… 7
理事会から …… 8

# 卒業生諸君へ
## ――晴れの首途に当って――

人文社会科学部長
大畑荘一

みちのくの地にも、そこかしこにそぞろ早春の息吹きを感ぜられる今日この頃、人文社会科学部における四年間の学生生活に終りを告げて、実社会に雄々しく巣立ってゆく、新しい同窓生諸君、御卒業お目出度う。心からお祝い申し上げます。

人々にとって春はいろいろの思いに胸がふくらみ、また新たな試練のときでもあります。学窓から社会への一歩を踏み出す諸君は、小学校時代から受験勉強に追われ、中学、高校、大学と、永い学校生活に終止符をうって、新しい職場に就くということは、それぞれの人生にとってまことに重大な転機です。

私は諸君へのはなむけの言葉として一言申し上げたいことは、いよいよ職業を通して具体的に社会生活に参加される諸君は、未知なるものへの期待と幾分かの不安と緊張を覚えておられることと思います。この感覚を初心といってもよいでしょう。人間だれしも物事に馴れると初心を忘れてしまうものです。

何事にも熟練することが大切なことはいうまでもありませんが、それによって初心を忘れ、新鮮な驚きとか、好奇心とか、慎みとか、畏れなどの感覚が働かなくなることが至極あたりまえになります。こうなると、あとはいわゆる惰性で生きるということになります。これでは向上進歩は止まってしまいます。人間だれしも、よりましな人間になりたいという向上心をもっていると思います。その気持を本当に生かすのは、人間らしい新鮮な感情、感覚をいつまでも失わずもち続けて、それを豊かに働かせることだと思います。人生やはり「初心忘るべからず」だと思います。

諸君は大学生活の間に、さまざまなことを経験されたことでしょう。程度の差はあれ、それぞれに、ある程度の専門的知識も身につけられたことと思います。しかしこれによって諸君が専門家になったとは申せません。本当の勉強はこれからです。大学は諸君に知識を伝達する場であると同時に、諸君の才能を啓発し、実社会に出てから活動する潜在力を養う場に過ぎません。

さて、人生のうちで最も多感な青春時代の一時期を過された本学部を、この度去られる心境、さぞ感慨も一入であろうかと思います。

諸君は、昨年一昨年の卒業生と同様に、わが人文社会科学部創設時代に入学されたいはば人社部草分けの人達であり、諸君の活躍は、今後の後輩諸君に限りない励みと希望を与えることになりますので、どうか健康に気をつけて大いに活躍されることを祈ります。

# 卒業に際して

## 卒業にあたって

地域文化コース
対馬達司

君にとっての大学とは何だったか、といま聞かれたら、どう答えるだろう。夜が明けるまで語り明かした寮の部屋、アルバイト先の働く人たちの姿、学問に生き方に少なからぬ影響を与えてくれたサークルの仲間たち、病室のベットのうえ、一冊の古典、……。「教室」だけの大学にとどまらず、それが、その外と結びあうことによってはじめて大学が大学たりえたようにおもう。いまおもえば、社会科学を学び、「生きること」の根本をつか



みたいと人文社会科学部に入学して四年、ともすれば、答を見つけようと急ぎがちだったような気もする。真剣であるのならいいのだが、一を聞いて十を知ろうと欲ばっていた。けれども、大学を出ようとする今、十を聞いて一を知ることの大事さを知ることができたし、そしてなによりも、一生考えていけるような問題をかかえることができたこと、自分らしく考えていける基礎をみつけることができたことを喜びたい。一を知るために十を聞くことは、個人の能力をこえていることも知ることができた。それは同時に自分と自分につながる人たちのかけがえのなさに気づいたことでもある。まさしく、そのことが大学における決してひとりよがりではない真理探究を保障してくれるものなのだろう。ただ残念なのは、そのような真理探究の場が圧迫され、学ぼうとする人たちに対して経済的にその門がせばめられつつあることなのだが。

卒業とともに「教室」としての大学からは遠ざかる。しかし、人間は人間のなかではじめて人間らしく生きていけるかぎり、別の意味での「大学」は依然として私のそばにあり続ける。ただ望むらくは私にとって人々がそうであったように、人々にとって私がすばらしい「大学」になることだ。なれない、とは思いたくない。大学で学んだものとして、人々を大学とし、自分もその大学となることは義務であり、喜びであり、誇りでもあるのだから。

すばらしかった「私の大学たち」をふりかえりつつ、真理への道をさし示してくださった諸先生方、学生生活の根本を支えてくれた家族、人生に直接に関わってくれた仲間たち、そして、「大学」そのものであり、また大学の基盤そのものを支えてくれたすべての働く人たちに、感謝と尊敬の意をこめて。未来圏から吹いてくる透明な清潔な風をその手の中に。新しい時代のコペルニクスたちへ。

ではお元気で。

## 卒業にあたって

社会科学コース
佐々木喜子

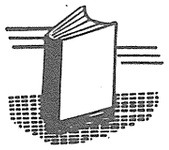
テレビにニュースで、大学入試に臨む受験生の姿が映し出されている。共通一次という言葉が使われるようになって、早くも五年目。今年もそんな時期になったんだなぁと思う。思えば、我々が初めての共通一次体験者であった。受験生はもちろん緊張していたが、今考えれば、大学側だってよほど緊張していたにちがいない。そんな我々も、春には大学を卒業し、各々の世界へ散っていくわけだ。

大学にはいって、大学らしさなるものを感じたのは、やはり二年の時、専攻別に分かれてからであった。私は行動科学研究へ所属したわけだが、当時は漠然とした興味や関心はあっても、それを具体化する手段をほとんど知らなかった。それが、専門の勉強をして新しい知識に触れることにより、ほんの少しずつではあるが、その指針が見えてくる。これがちょっとした快感であった。その頃は、専門的知識などこれっぽちもなかったものだから、見たこともない英語の文献を手にしただけで、これはすごい、と単純に感激した。そして、これを自分が読むんだなぁと思うと、妙にうれしかった。もちろんそれは始めの頃で、実際に深くかかわり始めると、そんな簡単なものではないことがじわっと身にしみたわけではあるが…。とにかく、動機は何であれ、好奇心を引き出す機会に遭遇したということは、私自身にとって貴重なことであった。

そもそも、大学というものを、自分の生活でどのように位置づけ、利用していくかは、人それぞれであろう。私自身、この四年間、クラブ活動やさまざまな人間関係の中で、多くのことを経験する場としてきた。しかし、

大学本来の意味から、少なくとも、学問的好奇心をかき立て、その探究心を満たしてくれるような場であってほしいと思う。人社はまだ歴史も浅く、我々がやっと三回目の卒業生であるが、今後将来にわたってよりよい学問の場を提供してくれる学部であることを望みたい。特に個人的に言えば、人間行動に視点を向けた「行動科学」をひとつの専攻として設置したことに対し、大きな期待をいだくものである。

行動科学研究は、人社一号館の最上階である六階に陣取っている。何とかは高い所が好きらしいが、とにかく見晴らしがよかった。社会調査室の窓から見える四季おりおりの岩手山の姿は、さまざまな思い出とともに、いつまでも記憶に残ることだろう。



卒業生を代表して二名の方に寄稿していただきました。後輩諸君の活躍を期待しています。

窓

――会員のたより――

## カメラをまわして

遠藤　隆

第一期生が卒業してから早くもというべきか、ようやくというべきか二年がたち、また来月には、新たな同窓会の仲間たちを迎えようとしています。

人文社会科学部で最古参だった我々には先輩なるものがいなくて、天上天下唯我独尊、一人よがりで大学のキャンパスを闊歩していたように思います。ところがどっこい社会は厳しい。卒業したとたんに、上司や先輩などに取り囲まれ、注意をされ、怒られ、世の中の面倒さを思い知らされた方も多いのではないでしょうか。

しかし、二年もたつと、ようやくこうした面倒にも慣れて、まあ自由な気分になってくるものであります。

そして、仕事の面白さや、楽しさを覚え、大学時代とは違った悪い遊びも覚え、失敗もやらかしている方もいらっしゃると思います。小生は現在、岩手でテレビニュースを作っていますが、特大スクープをやって表彰されたかと思うと、絶好の角度でカメラを回して、意気揚々会社に帰ってみたらフィルムが入っていなかったなどといろとんでもないドジをやらかして大目玉を喰らったり、まあ面白おかしく仕事を続けています。

去年の盛岡は、東北新幹線が開業したり、善幸総理がお国入りしたりで大忙しの年であるとともに、飛躍の年でもあり、ホテルラッシュ、観光客のラッシュなどで大賑いでした。大学を巣立った皆さんが久しぶりに盛岡に来られたら、きっと驚かれることでしょう。

夜十時になるとひっそりとしていたかっての盛岡とは違い、今や午前一時二時まで開けている飲み屋も珍しくありません。

「大都市」へと移り変る盛岡で、今月十二日に行動科学の同窓会全国大会を初めて開くことになりました。さらに、今年のゴールデンウィークには、人社の同窓会全国大会を同じく盛岡で開くことになっています。人社同窓会を開くときには、会員もざっと六百人にふくれ上がっています。仕事の都合などでどうしても来られない方もいらっしゃるかと存じますが、時間のある方は是非いらして頂きたいと思います。

懐しい悪友の顔、単位をもらえないで泣かされた先生と久しぶりに顔を合わせ、四年以上を過ごした大学時代を思い起こしましょう。



そして、たまには社会のアカを流し、放歌高吟しようではありませんか。

（テレビ岩手勤務）

## 「農業高校生と英語」

押切守夫

盛岡から、県北バスで八幡平方面に四十分ほど北西に向かうと、途中に私たちの勤務している盛岡農業高校の校舎がみえます。赴任してわかったことは、学校の歴史がもう百年以上で、全国規模でみても、古豪の部類にはいると思います。また、生徒数は、七百数十名で、学年は、農業科、園芸科、畜産科、生活科、林業科、農芸化学科の六学科からなっています。各種の行事が組まれていて、農業科目の実習があると、英語、数学など普通科目がつぶれてしまうこともあります。特に予習が必要な英語は、生徒が授業に参加しょうとする態度を示さないと、ほとんど意味がないことを実感しました。というのも授業で生徒に予習の成果を発表してもらえることを期待すれば見事に裏切られるのです。ときどき、「英語の授業は、随分教師と生徒の間で関心度にギャップがあり過ぎる。」と思わざるを得ません。いざ実業高校で、教鞭をとってみると、私が普通高校でかつて学んだせいか、この二つの学校を比較してみると、共通点よりは相違点が目立ちます。誰しもが知的な対象にある程度は、興味を示しますが、本校の生徒は、知的、理論的というよりは、むしろ、実際的、体験的といったほうが妥当だと思います。また、男子だけのクラスと女子だけのクラスでは、授業の雰囲気、学習態度等にかなり顕著な差がみられます。女子生徒は、英語の音声面、運用面に強い興味を示します。和訳するよう指示すれば、ほぼ正確に訳せる生徒が少なくありません。

最近つくづく思うことは、職業高校に務めているためか、「非行」と「英語教育」とに注目せざるを得ず、両者に関連がありそうだということです。これを少し詳しくみてみると、英語を通じて非行を防ぐには、教師と生徒の授業における人間関係がうまくいったかどうかにかかわってくるという面があると思うのです。常日頃心掛けていることがあって、英語の授業を楽しくやり、授業時における発表で、生徒の自己実現をはかることが出来たら、教師と生徒にはね返ってくる収穫は測り知れないだろうということです。

私の校務分掌は、寮務課で、舎監命令を受けていて、月に二、三回、本校の寮の宿直があります。授業で理解できる人間像は、まず表面で、生徒たちが日常どんな生活を送っているかは、寮で観察するしかないのです。

ある日、それは、定期試験の期間中でしたが、夜、女子生徒が、三、四人、不安そうな顔をして事務室の私のところに来ました。相談の内容は、化学の試験が次の日にあるので、少し教えてほしいということでした。英語だと思っていたのが、そうではなくて、困りました。今では、約一時間半、化学を教えたのがなつかしく思います。そのとき、「教師あっての生徒、生徒あっての教師」だという教訓を得ました。これで私の体験談を終わります。

（岩手県立盛岡農業高校勤務）

会員のみなさんの便りをお待ちしています。どんなことでも結構です。左記までおよせ下さい。

（〒〇二〇）
岩手県盛岡市上田三丁目十八番三十四号
岩手大学人文社会科学部同窓会宛

この三月をもって退官なさる、八重樫喬任先生に御寄稿をお願い致しました。退官後も、人文社会科学部の非常勤講師を勤められる予定です。

# 盛岡案内記

欧米研究（露文学）
八重樫　喬　任

盛岡という城下町のほんの一端を紹介することにするが、釣り狂の私であるので町の案内か川釣りの案内か分からぬ拙文になるであろうことをお断りしておく。

盛岡の町の真中、中央病院の所の中津川に架る上の橋がある。欄干には慶長年間の擬宝珠が冠せられていて盛岡随一の名橋である。鮭が上って来て悠々と泳いでいる姿を見たのは、この橋の上からであった。

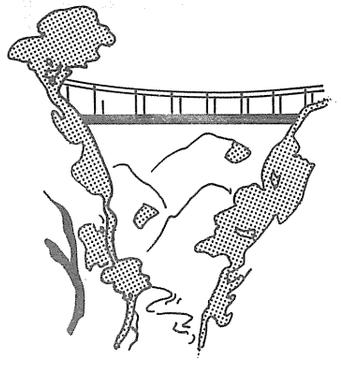
下って中の橋。この橋のすぐ上手の市役所裏には流れの緩いポイントがあって、ここは奇妙にヤマメが少々棲息しているところである。ここで釣り糸を垂れても、頭上の中の橋を通行する人が立ち止って見下ろすような現象は殆ど見られない。上の橋とちがって中の橋という橋は、どうやら人をして急ぎ足にさせるところがあるらしい。

さて下って下の橋。この橋の近くには県下一のヤマメ釣りの名人S氏が釣道具屋を開いている。この御仁は何時頃、何処そこの川で何が釣れるか我々に教えて下さるのであるが、私の場合まず釣れたためしがない。親子二代の釣歴のなせるわざなのか、そのウンチクには驚き入るほかはない。ただしこの名人は多少話し好きな方であって、まず三〇分位は釣り談義のお相手をしなければならないのが通常である。それくらいのウンチクの価値は十二分にあるのである。

この下の橋の下手は一寸面白いポイントが北上川との合流点まで続くが、三年前の秋の雨上りの頃、ここでイトウという大変珍しい魚を釣ったことがあった。

ここの下の橋中学校は明治初期には刑務所の跡地であって、さる大政治家がここに収容中、悠々と釣り糸を垂れていたというエピソードがある。その以前の幕藩時代には、ここは刑場であったらしい。さしずめ盛岡の鈴が森である。

上の橋から下の橋にかけての両岸は、盛岡の町でも、散索に最も好適な小道の一つであろう。試みに、中の橋の下手、右岸の南部藩の御紋のついたベンチに腰を下ろして、眼前の中津川の絶えず聞え来る川波の音に耳をすまし、向い側の杜陵小学校の少々古ぼけた校舎を眺め給え。盛岡に来て岩手大人社学部に学んだ青春時代の思い出の一つになることであろうと思う（因みに、私はこの杜陵小学校の第二回卒業生――昭和五年――である）。



八重樫喬任先生に、同窓会より記念品を贈呈致します。先生の御健康とより一層の御活躍をお祈り致します。



# 支部の動き

大学卒業後、各地に散ったみなさんも、職場の雰囲気にも慣れ、それぞれ活躍なさっていることと存じます。同窓会では、会員の親睦を深める意味から支部づくりを呼びかけてきましたが、ようやく、各地から支部結成の動きやコンパの話が伝えられるようになりました。そこで、この場をかりていくつかの支部についてお知らせしたいと思います。

## 岩手県

一昨年（昭和五十六年）十一月に支部総会が開かれて以来、仕事が忙しかったり、都合のいい月が選べず、集まる機会がありませんでしたが、昨年十二月に忘年会を開きました。急な決定でしたので、岩手県というよりは盛岡支部という感じでしたが、十名ほどが集まって話にはなをさかせました。なお、県友部として以外にも、女子だけで集まったり、気のあった仲間で飲んだりすることはよくあるようです。

## 関東地区

昨年十二月に上野のなんとか亭で集まったことが伝えられています。関東地区では、以前から何人かで集まって飲んでいることはよくあったようですが、廻状によって集まったのは初めてのようです。なんでも、連絡に会社の封筒が用いられたとか。経費をかけずに行なうにはいい手かもしれませんね。支部（関東本部だという話もありますが）の代表者などが決まりましたら、同窓会の方へも御連絡下さい。

## 秋田県

今月（二月）十九、二十日に開くことが伝えられています。盛岡からも参加してくれるように言われていますが、都合がつかず参加はむずかしいようです。山形県からの参加もあるようですので、充分楽しんでいただきたいと思います。なお、代表者などが決まりましたら、会合の様子と共にお知らせ下さい。

# 盛岡あれこれ

久しぶりに盛岡にやってきた友人たちは、駅前に立って必らず驚きの声をあげる。新幹線の開業で駅前は一変してしまったからである。広場は整然とし、バスのりばはロータリー化している。さらに、地下通路によって、駅地下街とバスのりば、さらには駅ビルまでもが結ばれている。開運橋のたもとには、大きなホテルもオープンした。駅前のビル化をみると、とうとう盛岡にも新幹線化の波がやってきたことがわかる。

そういえば、よく散歩した城跡に木造の武徳殿が建っていたが、昨年、保存運動の甲斐なく取り壊されてしまった。古いものが、一つ一つ消え、一方で新しいものがつくられている。母校では大教室が建設中である。ダンプカーが資材を積んで走る姿を見ると、入学した当時の頃を思い出す。あのころは、正門もなかったし、校内は舗装されていなかった。雨が降るとぬかるんだ、あの道が懐かしい。大学の姿も年々変わっている。盛岡に住んでいても気づかずにいることもある。ちょっと足を運んで下さい。少し前の自分の姿が、そこに見えるのが不思議です。（佐）

## 理事会から

### 五月上旬に親睦会開催予定

すでに述べましたように、全国的規模での会員の親睦会を盛岡で開くことになりました。親しい仲間どうしでは会っていても、遠くに住む仲間とはなかなか会えないものです。そこで、理事会でも、一度やってみようか、と意見がまとまり開催のはこびとなりました。五月上旬の連休を利用して開く予定ですが、詳しい日時や会場などは決まっておりませんので、御意見等ある方は同窓会あるいは役員宛までお知らせ下さい。なお、三月中には詳細を決定し、ハガキにて参加の有無等をとる予定でいます。何分にも、初めてのことですので多数御参加下さるようお願いいたします。開催地を東京に、という意見もありましたが、最初はまず盛岡で、ということになりました。以後のことは会員のみなさんの意見を聴いてから考えたいと思います。みなさん、盛岡で会いましょう。

### 会費納入のお願い

毎回、会報を発行するたびにお願いしているのですが、まだ会費を納めてない会員の方が多数おられます。現在、会費納入不足のため、この会報を発行するのがやっとの状態です。第一期生が約五十名、第二期生が約九十名が未納の状況です。終身会費として一括納入が困難な場合は、年会費だけでも納入下さい。なお、会計年度中に納入されませんと、年会費が加算されていくようになります。郵便振替の場合は、次の口座を利用して下さい。

口座番号　盛岡五四二三

岩手大学人文社会科学部同窓会

### 学術講演会について

事業計画の中で、今回から設けました学術講演会等の開催についての援助は、有効に使われ、ほぼ予定どおり開催されました。また、この講演会は、岩手日報紙でも取り上げられ、開かれた大学への一歩として高い評価を得るとともに、今後の開催についても期待したい等の記事が掲載されました。なお、詳しい報告については次回の会報でお知らせしたいと思います。

## 鉛筆削り

何度やっても編集とは疲れるものである。同窓会の仕事に専念できる者がいないのだから仕方がないが……。たまに集まると結婚の話がでる。誰が結婚したとか、しそうだとか。そういえば先日も、「結婚でもするか。家つきの婿入りでもしようか。」と冗談で言ったら、ある友人が、「二、三頼まれているんだ。みんな短大出の若い子だぞ。」と真剣な顔でいう。その時は、あわてて話をとめたが、最近このことをまた考えるようになった。断わっておくが、「若い子」に引かれた結婚話ではなく、「結婚」ということをである。哲学的に考えるとむずかしい。でも、これだけは言えそうである。この分では、当分結婚はできそうにないと……。

### ＜編集部より＞

二月上旬には発行したいと考えていましたが、やっぱり遅れてしまいました。誰か、仕事を手伝ってくれる方いませんか？一人でやるのは、やっぱり疲れるなあ。